

追悼

わが師、寺門誠致先生を偲ぶ

2015年4月15日、動物衛生研究所（動衛研）から電話があり、元農業技術研究機構 畜産研究担当理事（元家畜衛生試験場長）の寺門誠致（てらかど のぶゆき）先生が今朝逝去されたとの訃報を受けた。享年72歳のあまりに早すぎる死であった。ここ何年かは病気に苦しんでいたとお聞きしていたが、いつも元気浚刺で舌鋒鋭い寺門先生が亡くなられたことは、獣医界にとって大きな損失である。先生は獣医学分野における薬剤耐性菌研究のパイオニアであり、農林水産省動物医薬品検査所（動薬検）の先輩職員でもあった。ここに、先生の功績と人となりについて紹介し、先生から受けた恩に些かでも報いたい。



先生は1943年1月に東京都杉並区に生を受けた。父上は歯科医院を開業されていた地元の名士、篤志家で無名の画家を支援したり、書や石の収集など文化的なことに非常に造詣が深かったようである。先生は剣道などのスポーツや野菜栽培、競馬、麻雀、音楽など多趣味であり、先生の公務員宿舎には似つかわしくない絵画や書があふれていたことは父上の影響を大きく受けていたものと想像された。先生は1965年に北海道大学獣医学部を卒業と同時に獣医公衆衛生学講座の助手として社会人の第一歩を踏み出された。その後、1969年に動薬検 検査第二部に出向されたが、丁度その年に、英国で家畜に使用される抗菌性飼料添加物によりサルモネラが耐性化し、それが食品を介して人に伝播することにより、人の健康に悪影響を及ぼしているとの報告書（スワン報告書）が議会に提出された。当時、畜産局衛生課で国際防疫を担当されていた故緒方宗雄先生の依頼で、寺門先生が本報告書を翻訳されたことを契機として、精力的に家畜由来の薬剤耐性菌問題に取り組まれることになる。*Bordetella bronchiseptica* の薬剤耐性が薬剤耐性プラスミド（R因子）に支配されていることを分子生物学的手法を導入して証明した研究は、従来、R因子が腸内細菌に限定された現象であったものに、呼吸器系病原細菌にも適応できることを初めて示したものである。現在、我々が世界と肩を並べて耐性菌研究を行う契機をもたらしたのが寺門先生で、その意味では「家畜衛生分野における耐性菌研究の父」とも言えるであろう。その後、寺門先生の主導で日本初の全国耐性菌調査事業が行われ、現在、動薬検を中心に実施されている家畜衛生分野における薬剤耐性モニタリング体制（JVARM）の基礎が確立された。*B. bronchiseptica* の薬剤耐性に関する研究で北海道大学から学位を得た後、1976年に家畜衛生試験場（後の動衛研）製剤研究部に移られた。そこで先生はクリプティックプラスミドがトランスポゾンを通じて容易に伝達性Rプラスミドになりうることを証明しプラスミドのさらなる重要性を示された。当時の研究室は新しい分子生物学的な技術を習得したいと沢山の大学教員や研究者が研修に訪れており、今日のわが国を支える多くの優秀な研究者を育てられた。その後、家畜由来耐性菌研究は急速に下火となったが、2000年に動薬検を中心にJVARM体制が構築された際には、大層喜んでおられた。

その後、先生は、農林水産技術会議の研究開発課長、動衛研所長や農業技術研究機構 畜産担当理事を歴任し、当時、日本の畜産に危機をもたらした牛海綿状脳症、口蹄疫、鳥インフルエンザの発生などに対しても持ち前の決断力とリーダーシップで適切な対応を取られた。さらに退任後は民間の製薬会社で動物薬の開発に従事され、これらの業績に対して、平成25年度春の叙勲で瑞宝中綬章を受章された。

そして、全ての公職から離れられた矢先にすい臓がんが発見された。手術前に順天堂大学病院にお見舞いしたが、その時に現役時代は十分に働いたので人生に全く悔いはない、残りの人生は奥様のために生きると話されていた。長時間に及ぶ大手術ですい臓を全摘出された後は、インシュリンの自己注射などで体調がすぐれなかったようであった。様々な趣味を楽しむ間もなく逝かれた先生は、まさに仕事に生き、仕事で人生を終えたように思われる。寺門先生は豪放磊落で小さなことに拘らないようにも見えるが、実は大変神経細やかな人情家で、葬儀にも様々な分野から多士済々が参列した。残された期間を最大限に使って、先生がなし得なかった家畜衛生分野における耐性菌研究をわずかでも前進するよう努力することをお誓いして本稿を終えたいと思う。最後に葬儀でご子息からご紹介された先生の最後のことば「ありがとう。さようなら。」を私から先生にもお贈りしたい。合掌。

田村 豊（酪農学園大学獣医学群教授）